重修真書太閤記

七編

五

へ13
459
65

特13へ
門 ゆ
號 459
巻 65

消 理福旅

重修東書太閤記七編巻之十三

中村長兵衛明智を突事
并光秀遺言傷害の事

六月十三日丑刻ごろ三四十騎忍びて通ふ時の音と小栗栖の里人聞付落人とあやゆるぞ出合や出合やと木を扣き貝を吹立たちまちふ数百人くせ集とバ村越三十郎大音よこい不思議なり織田方の侍ゞ近江路へ趣くなりさまざまとるあと呼くれバ織田方の侍ゞ何条近江へおもむくべきぞめのふいくをを打取てめのらぐをげと口々ふ

同攻會印

の〳〵と切てゆき〳〵しゐ今いうふたゝびそれ打拂へと無二無三に突〳〵る元ろう勝ゑ〳〵武功のゆの共なり一揆忽打負てちり〳〵と逃散たり爰に小栗栖の里人中村長兵衛といふものの明智が勢に切立らゑ心の中に是ぞたゝ〳〵明智勢あらゆとおのひつゑゐ藪と小楯にふ〳〵ゆ〳〵ゑ今や〳〵ゆ川わどに真先にゐう川村垣三十郎のがとゆ〳〵と突ゆけ〳〵ゞ鎧の胴を突をべら〳〵て手おゝゝをびその次い進士作左衛門ゐれも目當違ふて突ちゞを弟六番い明智日向守鎗ひつさげ〳〵馬をう川長兵衛今度いのゞさゝと藪越るゞつさと突べあや

ゆゝゞ光秀ゞ右の脇腹をゐ〳〵ゆ〳〵ゆ〳〵ゑ川〳〵突ゑて光秀氣をゝ〳〵ゆゐ鎧をたゝ〳〵ゐふゝ定め三十餘町を打〳〵ゐども次弟ゑ心神惱亂〳〵馬の上にたゆるべ〳〵も覺えざれい鎗をば田中に突たゝ〳〵ゆゝゝ一町だゐゐゐちゆゝゝ終に鞍にたゆゐ得ゞ真逆ゝゝ落てゞゐ跡に付て打ゆる溝尾勝兵衛ゐれを見ていいゐゐゐゝと馬ゐう飛下ういゐゐゐやいゐゐゐと問ゐゝゑ川〳〵光秀勝兵衛ゞ手を取て藪越ゐゐゐゝゑ〳〵時ゐさゝゝでゝもおゆゝゝゞゐゐゞゐの疵おゆゆひの外にふゐゐやゐゐん痛強〳〵て馬ゐゐものゐゐゐをゐゝゝゞ坂本ゆゞをたゆゆひゐゐゐゐゐゐ我い爰にて生害せ

んとゝゆ〳〵我首を取て妙心寺へ持行汝よとゝ〳〵鎧
とぬぐとくまとのゝふるゝ早く上帯を解ちらば引合
ふる畳紙を取出し矢立の墨をて

順逆無二門　大道徹心源　五十五年夢　覺

来飯一元

と記し〳〵こゝを勝兵衛よりとゝ〳〵やうて腰刀を取て
腹よ突立〳〵うども引廻にいさ力なく只ふはうよ
ふはう〳〵めゞ苦痛さゝゝと溝尾勝兵衛太刀ふう
上て首とうつゝ〳〵る處へ進士作左衛門引返し来
てこのありさまを見るものうもちろ云甲斐ふき御
ありさまや某ちを御先を仕るべきのまてゝふ

ゝとのひもとゝゝび光秀ゞ腹よ突立たり〳〵脇差の
刀をぬいて心元よおし〳〵あてけるこはらぬうゝとて伏
たりけり北田帯刀ハ一揆ともよとう巻れけるを
切たゝひらり拂ひおゝくゝとゝをよめけ来り是も大
よ驚き深くゝふ〳〵暫くゝもをゝへやとゝいひも
とゝぬよ則家の刀を抜目首をゝき落し光秀の骸
よいさき付てゞ死して〳〵けり勝兵衛ハとうさゝの
共のとりくよ振舞を見ていとゞ心もみゞれ我も
共よとおゝのひ〳〵共ゝ〳〵主人のいとゝとゝ
あゝとゝて進士と北田ゞ面の皮をとゞ捨誰とも
見知ゝぬ様よ取ち〳〵光秀の首をば馬擅よつゝみ

妙心寺へとたどりさ〜小栗栖の山を越けるよ
こるも一揆充満てふ〜山と越ゞさく妙心寺ま
でいそるかなう行先ともいうなるんもものぶとと
ゝを松風も追手の聲うとあやしまれいとて心を
うちさとさ詫うさなひゝとゞ山科の北の野山を堀
うゞち光秀の首級と馬鐙まつくゝて埋をさゝて
勝兵衛もおの處まて自害せでゆとおのひあゞら
見る人あうやと四方をみゝとゞ溝尾ゞ草履取よ與
七郎といふものの只一人ぞ從ひたり勝兵衛嬉しく
與七郎を呼近ぢけ我等ゞ運命つきて〜ゆくの
如くなう行と前世ふうの約束なれゞ今更誰をう

恨むべきたゞし世よなるき主君のゆくみの水茎お
ゝを坂本まで持參らんとれのへとも敵四方よこ
ちたるうへ路よ一揆の勢ゆさゝ我等うゆくべき
道ぞなるき汝をゞ誰も見知ん樣ふけゝとゞ心安く坂
本よ行着て長閑どのよ奉るべ〜とのひもをとう
ゞ腹うき切て息絶たう與七郎も十方ふくれひう
がせんとたのふうちてゆ處々よ貝ふき立一揆の
ふるる聲せ〜うゞ溝尾う死骸をゆ〜とべきひま
となるきまゆ〜勝兵衛う鬢の髪をれ〜切てゆの辭世
の筆の跡とを取めちて夜よまきれ坂本さ〜て落
行ぬ扨まゆ〜中村長兵衛い夜の明るふ從ひこ〜や

かゝること尋ねつゝ溝尾勝兵衛茂朝ゞ死骸を見出し〳〵見まゝば泥ふゝく入〳〵と見へ左右の足膝を過るまでぬけられたりあまい必定主人の首級と深田のうちよりかゝせ〳〵ならんとそのあたりを子細に見まゝば首なき死骸のうゝとゝに緘毛ゝろ〳〵き鎧あり金銀を以て桔梗の紋を打て付つるかよまた日向守光秀なるべ〳〵その傍に二人まゞ腹切て死〳〵たまいあるもくの人みていあるもあらんまさうち返〳〵改めるに首なき骸の脇ぢらに鎗疵あまたあるさ〳〵長兵衛ゞ突〳〵跡なりとたのゝ定め猶もそのあたりを尋ぬまゝば北の山際に新に土を堀たゝ〳〵たる處あり何とゝ堀たるまやと土をかきこけかきまゝけみまゝば馬鐔に包ら〳〵首級あり死〳〵て幾時もへざれとも土中にうづまて温氣にあたまゝその肉たちてやゝ面影いかてれども正〳〵く光秀と見えけまゝば長兵衛喜びかの骸とゝかの筑前守の本陣三井寺へ持参〳〵たりしゝ筑前守大に ゝろこび褒美あまたゝ賜ひてけり

陰徳太平記に明智光秀主従三人にて小栗栖野を過けるゝ所に地下人作左衛門一説甚大夫ゝ也を知て藪の中にうゝ鎗を以て突けまゝば微運のかなゝさい脇腹にたゝうゝ中うけるゝを鞍の前

輪よりうめく二三町へ行延しかども痛手なれば
終に死してけり明智庄兵衛光秀の骸を泥中より
うづめ首をば夜中に京へ持上う智恩寺に入て
知たる僧に埋藏を頼その身い何處とも知
ぬ落うをしとなう夜明て作左衛門明智の死骸
を尋出し筑前守の陣所へ持參しけるに寒美と
して金銀を賜ひける然るに筑前守関白に任
じあひてのち彼作左衛門を呼出し光秀を討し
こい一旦の功あうといへども山科のものゝ
もをれば一揆をたこしあまつさへ天下の武將
地下人の分として討取しこと過分の働なう向後

の見こゝにとて作左衛門一類七人をめし捕
碎にあひけらしとあう
又一説に中村長兵衛伏見桃山に住そといへう
爰に光秀ゞ嫡子十兵衛尉光慶今年十四歳丹波
山の城に在て煩ひけるが六月十三日終にとろふ
くなるに十兵衛尉ゞ後見明智五郎兵衛惟恒
ふうくとおれと哀と乘山崎の始末と聞悲歎に堪ず
忽に自害して失けゝ十兵衛ゞ乳母夫妻木七右
衛門内藤三郎右衛門葬藏の車終うてのち二人共
髻切こゝひ出家遁世の身となうゆる哀なうける事
共なう又津田與三郎渡邊源右衛門志水嘉兵衛三

人も山崎の軍に戰死し藤田傳五行政は蜂谷と軍しける後
三七殿の御内なる峯信濃守平田壹岐戰て二人と追ち
ふしける處へ國分左渡守横鎗に突しかば三七殿取て返し
金の杵の馬印とたし立その下にゐる山崎主水鹿伏兎右京
たちとりもそう攻戰ふるゝども諏訪六郎藤田と助來りて
戰ふとゝへども味方は次第に氣つかれけるゝゝ傳吾が嫡子
傳兵衛秀行舍弟藤藏行久壹足も引ぞ討死此間に傳
吾は櫨に入たとひけるゝと淀のゝへ落て行

藤田三宅戰死生害の事

并筑前守の諸侍京都を鎮むる事

藤田傳吾行政は櫨に向ひ其手と眞眼に血入て敵

味方のあはうとゝ依て其方に敵方へ馬を向
ふとはひつるがたゝは敵の方にあるまゝきふ
う何故我を欺きぞとゝ敵方へ引むけようとはゝ
ど櫨答へける樣敵はとゝくみてゝ合京へ京へと
てせひ間後陣に打せゝは羽柴殿やうてたゝの筋
と御登うと存知ひて方へ引むけは追付ふさ
敵に合を申ひべしとはふを聞何と云ぞ敵は皆京
へ向ふとゝ勝龍寺の城は何とかゝとゝ聞つるゝ
こ間櫨申ける今朝十四日敵勝龍寺にあゝを
合戰ひゝゝ三宅殿は花やかに軍してそのゝち
城へ火をうけ自害して失ひゝゝと承てうはとは

へべ行政おふ〳〵やま〳〵我等もこゝまて自害〳〵て山崎ゟ死ゐざう〳〵恥辱雪ぐべ〳〵とのひもとゝ
ぬゟ刀をぬくゝと見ゑべ忽左の脇ゟ突立右のめ
たへ静ゟ引廻し馬ゟう落ゑべ眠るゞ如き主人の
首と礒の岡木次郎助丈錯〳〵その刀を取直し已ゞ
頭ゟあ〳〵あて両手とゆきおとゝゟ美事
ゟ死〳〵たるゝ世ゟたくひなき勇士なり然又丹州
八上の城主明智治右衛門光忠い去二日二条の軍
ゟ先登〳〵鉄炮ゟあゝうけるゞその痛以の外ゟそ
ゟけゑべ知恩院ゟ寄食〳〵療治〳〵ゟとゝく平
愈せざう〳〵故山崎へも出陣せざう〳〵ゟ天王山の

軍破ゑ〳〵ろう味方敗北〳〵日向守小栗栖ゟて自害
〳〵る由と聞我いろうなんべゝ迫武運ゟ盡たる
ゟや山崎の軍今四五日も遅んべ鞍ゟ結付られて
も出陣〳〵面々と共ゟ戰死とべき身ゞゝ〳〵
と閑居をゝと口惜やと涙を流〳〵て悔こゝるゝを聞
光忠う家臣澁谷佐野友田なゝどいふのゝゞゑゟ
も八上へ御帰うのゝち御思案あゑと諫めゝるゝを
ゟ聞もせべ

誰為の名なゑとべ身とも惜むゝん
恥るゝのゝ武士のゝち

と詠ゞ〳〵人もありとゝ〳〵我いやゝ〳〵も明智の名

字をけうに身なり何とて八上へ帰り入りひあき命をおしむべきぞとのひも終らぬ腹めさ切て失みけり行年四十三歳いまゝ盛なるあしめるべき歟なりとまいらせて置羽柴筑前守山崎の軍にうち勝舎弟小市郎秀長と京都へのぼせ菊亭晴季公といひて入魂の事なれば逆臣明智日向守を追崩しゝ由を言上し追付帝都安穏に守護し奉るべきあて條奏聞願ひ奉る由を演説をしうば菊亭殿即刻参内ありて奏聞を遂らるゝとなり

此年正親町院の天皇の御宇すゝて内裏い土御門なり天皇宝算六十六にあたるゝまと菊亭殿い

内大臣にすて御年四十四歳なり

この時浅野彌兵衛長政青木七郎右衛門秀次両人秀長にさし添て京に入京都すてい山崎合戦のゝ

ゝと聞資財雑具をのちとゝぶ處へ羽柴小市郎の人数大勢すてあし來うしうばとて敵のゝをつ

ふゝと男女ふさけび上を下へと騒動しけまべ浅野長政青木秀次町人どもへ下知しけるい今ま

で明智日向守京都に有て万事を取よろふひし由なるゝ昨日十三日明智勢山崎にて敗北し光秀の

生死い未しらざれども今日奏聞をとゝげて京都のとい羽柴筑前守の手にて守護とる間汝等安心し

て家業と營むべしれのびたがへく何方へうせ去
やの〳〵又亂妨狼藉ののわくべ早々我等両人の
めくへ申出ひべしたちまちに召捕く正路の沙汰
といさめべ〳〵と觸たり〳〵ぞ只今遠方へ立退ん
とせしのいづれも立うへう何羽柴筑前守どの
京都の守護となるべふとやそれいむう〳〵木下藤
吉郎殿とひひ〳〵人なるその舎弟の小市郎殿とや
ら今日入洛あるしとひふわの藤吉郎殿いむう
しも京都ふまぐらく任ひく何事もく心の付ま
ふ人なるうきそれいまぐ若年のとふうき今い御年
もくとうて彩別さうときくのとそい太平

の花のくやこそ立帰る我々ぐ幸うあとひづとめく元
の家元のとこめへあち付ぬ
木下藤吉郎とて入洛あるしへ永禄十一年のと
なるとべ筑前守ひまぐ三十三歳の時なるう義昭将
軍宣下の雑事るうう二条御所の經營禁中御修理
の奉行泉州堺の町人どもと説て用途を奉らを
しふとそべく藤吉郎の方すこのう出し處なるう又
羽柴筑前守と名乗しい天正三年十二月のうな
とべ秀吉四十歳るうと知へ
又紫野大徳寺のうちる瑞峯院とて大友宗麟の
開基とし寺あるうこの瑞峯院の地とふくち木下

藤吉郎居住あるべし處なりとうやその隣の大慈院の奥まり伏見の掛山あたりまで平遠に一覽をべし

やがて京都へ静まりぬ内裏ゑうも様々と仰出さるゝことありけるゝと筑前守そもくゝ御請申上禁裏御領の地と定めまゝ公家衆の本領とゆゝ傳へゝる所處々と換地して七分へ地主へ三分へ領家と定めらるべしうべ今まで貧窮寒素の殿上人忽に所領一所の主となりけるふゝうう筑前守の長く京を守護とんとと庶幾しけるゝあるうそでめへ丈えゝ卿相ゑゝつゝう羽柴の門に名薄を捧げて追從ひ抑

人間五福の第一へ禄なりゝたるとぞあらんゝて筑前守入洛して光秀が殘黨と穿議なりゝそれゝのう江州安土の明智左馬助佐和山の荒木山城守長濱坂本の賊徒を誅伐とべしとその評定に

やうゝひう

安土の留主居明智左馬助光春へ土岐の一族にて土岐の明智下野守頼兼に七代明智十兵衛光繼の長男安藝守光綱光綱の子十兵衛尉光秀なり光繼の次男と兵庫助光安と云光安の子即光春なり天文六年丁酉に生とたまへ今年へ四十六歳なるべし又一本に兵庫助光安の兄あり早世して其子幼稚なりゝて光安のもとへ引とりて養育ひ生長して十兵衛光秀とゆゝあるゝれば光春と光

秀と兄弟といふべし又土岐系圖によれば土岐伯耆守頼貞の
末子を九郎頼基と云頼基の長男彦九郎頼重明智と号
し美濃國可児郡明智に住せしを以てなり頼重の長男
氏王丸のちに明智十郎頼篤と云頼篤の子明智十郎國
篤のちに刑部少輔と云國篤より八代明智監物助光國と
云即十兵衛光秀の父と云然れバ光國の弟を兵庫助光安と
云その弟を次右衛門光久と云後に長閑入道と云ハ是なり
江州にて筑前守に力を合せべきのよしたのまれしかど日野の蒲
生忠三郎氏郷その父右兵衛大夫賢秀おなじく等ハ故右府君に
無二の忠臣なれどもその勢たらねバ御臺若君をともなひ参
らせるを以て専とせるゆへなり光秀ハこれが為に出陣せる

ゐどのてふれをよばねど筑前守めくといそぎ夜を
日に継でも登るべきなりさてハ勢田の山岡美作守兄
弟いづきも無二のこゝろざしハさるとなれども光
秀の勢ようなきねバ今ハ田上の奥にかくしのぶなん
あるも等ハ甲賀蒲生栗太の郡に於てふるきのゝなれ
ぢたまうハその下知にしたがざるべきよし催促ふ
して手を合せる様ふなきとべきなりたまうなろし
めらんといふ所へ堀久太郎秀政つと出らきしかバ
筑前守いかに久太郎天王山のそこらさハ抜君羣ふい
とその骨折ついでに江州路へおもむかひあきと申さ
きしにより秀政しこまりひとて我陣所へ立かへり家

臣奥田三右衛門ゝ先陣うゝせ坂本安土を責んぐさめゝ出陣
と
堀久太郎秀政今年三十歳菅原氏なゝその父詳ゝ
天正十三年七月従四位下ゝ叙〳〵待従ゝ任び越前北庄十八
万石を領を外與力ゝ村上周防守義明六万六千石を領〳〵
溝口伯耆守秀勝四万五千石合を〻廿九万八百石を領を
とゝ〻ゝ

重修真書太閤記七篇巻之十三終

重修真書太閤記七編巻之十四

明智左馬助山崎後詰の事
并打出の濱大合戰の事

明智左馬助光春い五千餘騎を引率〳〵て江州安土ゝ在城〳〵ゝつ蒲生甲賀野洲栗太の郡を切従へんと
を以て任とゝ〻ゝけるゝ天正十年六月十三日山崎
ゝて筑前守と合戰のゝ〳〵と傳聞ゝ秀吉をゝ〻ゝ毛
利三家と和睦〳〵ゝけるゝゝゝゝゝゝ毛利ゝゝゝも筑前守見
をゝのため五十餘騎を加勢〳〵ゝる上筑前守い播磨
備前美作の勢三万餘騎ゝて兵庫ゝつゝ三七信孝

丹羽五郎左衛門尉長秀の勢と合せて切上ると云へ備へ定めて幾十段ふろ引配つらん就中山崎よりてん天王山ちそ大事の切處ゑと彼處すて支えゑべ西國勢を十日廿日いくひとゝむべ〳〵その備だてい〳〵と光春意よ定めたゝバ先手ゑまゑろう向ふべ〳〵とゑさうふ申請といへども光秀ちゑとゆるさゞ光春うさ孤く申ける様安土よ在城仕うゆとゑ尾濃北越の勢よそふえらゝい御計畧とハ聞へいへども信雄ぬ〳〵ハ右大臣どの〳〵御子と申ゑどもちそ大将ら〳〵と見えさせゑひ〳〵なれ右大臣とのゑ〳〵ゑさでのちたれういその人と重んゝその

下知ふ付いべゝ勝家一益ゑんどハ元ゑろう織田どのゑろびさせゑひてい何國へむゝそその横紙をバやぶるべゝさされゝ織田どのゑろびゑひてくゆ十日あゑろうふなろうゆへどもいまゞ出陣のおとゑひもなのくハ備中ゑろう京都ゑまで六十里よ及びハよ筑前守切上う兵庫ゑ〳〵ゑうすでも著陣と申をバ京の沙汰をさ〳〵ゑいふ直よ打たちしのゑるべ〳〵そゝと申も筑前ゞ弓箭のふり織田殿ふまさう〳〵處の有故とおゑえハさゝべこの山崎の軍ハ本能寺ゑう十倍も手強さ合戰とおゞ〳〵めをべくハ光春や〳〵ゝ敵も向てぬ空城よ多くの士卒をあそでせ

それゞのゝして居眠のゝふさんとあるうと申を
へ口昔くすると云ゞひなくいへぐいづまふも山崎
の御先手をとめゝく申請ゝと光秀聞ていやく筑
前よむうふゝ軍をるとい光秀一人ゝてとたるべ
ゝ三七や五郎左衛門い元ゝうゞふも入らぬゆ
のごもなう光春い安土よありて坂本と力を合を
光秀ゞ始終の固めとなるべきゆうたとへゞ軍ふ
ゆちたう共兵糧つゞうゞいいうふうをんむう
漢王の軍をゝ様を聞ふうきと破り鋭を摧きゝ
韓信ふう關中を鎮めて軍糧を續けゝ蕭何の功を
第一とゝ韓信いゝくらもあるべゝ蕭何い只一人

今の光春と蕭何とたのむなうといへれゝふう
光春ゆへを辭るくそのゆく安土ふらゞうて事
の様とさゞり聞ふ四方田但馬守明石義大夫ゞ途
中ふ待うゝ筑前守をうゝんとうゝて却て筑前守ふ
もあゝぬのを筑前守なうとおゆのひたゞゝ但馬
いうゝと義大夫いそうく京へ迎うへうゝなゞ云
ことまで事密うふ聞出ゝ何さまゝのつゆなゝぬ筑
前守ゞゝくさぶうあふゞうけくさ策畧と知てい
たこゝも油断いゆゝゝ然るゝと日向守殿のゝろ
ゆうさのゝおそゝとおのゝまぬ様なうゝをゝく
ゝさそのちふゆちいあうとの諺をつゆ口くを

にいくさ上一むらと忘れあひしかも何ふも此合戦心元なしとおのゝ付しかう光春は晝夜いとゞ思ふひ主君のゆるしいるけさども此城ふ五千の人数と徒よこゝ置んと勿体なしまつ坂本ふ妻子を置をあへばちくよも人数をこめらるしらん然ら山崎へむうふのの外ふ無勢なるべし万々一山崎すて敵をくひ止得ど挂川と東へ越をて戰ひし軍にうちしためしふ我等ゞ攻る身ふなりてたのしふるも天王山ふ搔揉うきめさろう落して方ゞるし敵を破ふら車むづうしてふもくふも出陣し軍の次第を聞定めさてのちふ謀はあるべ

ひきこしふ居ながらくふのをおのふいくるしけを
と五千餘騎ゞその中ふう三千餘騎を引とけその
のち佐和山の荒木山城守長濱の妻木主計頭ゞゆ
とく急ふ山崎へそを向ふゆし安土へ寄る勢のあ
ふちくべ加勢して賜くれやと申送うのこふ揉で
安土をのゞ出し野洲の郡を打過て瀬田の長橋と
たる項行うふ人のとろくふるとさけで山崎
の軍破ゞて大将明智どの勝龍寺ふ立このり只今
軍のふつたゞ中三宅藤兵衛綱朝らく防戰して羽
柴方せめあくんで見ゆるなうといふもあう又へ
山崎の軍敗ゞ日向守どのい討死あうしといふも

あう光春あれと聞てあそうとゝゆ山崎の軍事をみさうと覺ゆるそされいとて引うゝとゝ我なゝゝ進めや進め打やと引うけゝ馬をたゝらとる栗津の原をも駈通う膳所の松本うち出の濱より著ゝハ六月十四日辰の刻なう光春湖上を見セたゝてあの坂本ゑ主人の妻子なのゝゝゝゝ叔父の長閑齋の籠らまたう軍ハ必定今日明日ならめうう一まつ京へむうひ主君の安否を見定めてと思ひ直ゝ大津の在家を西へむひ鞭をあゝるむうふうう向ふ梅の紋うさたる大旗さゝを勢の目ど六七百ぢうう駈出たうよれい誰とうゝ見まバ

堀久太郎秀政ゞ勢なう光春さいとおのひけるハ是ハ山崎の軍ゑ打うち坂本を攻んとてうるならん折ゝも爰まで來會しのゆゑ坂本ゑてをいまゞゝゝとも知ゝたれすても坂本へ告知セ合戰の用意をセゝやと下知ゝ川ゝその身ハ堀ゞ勢ゑてセ向ふてまゞ鉄炮をうさせけう堀ゞ先手の足輕ども拮梗の紋の旗を見るとそのまゝ後陣へゝゝと知をけまバ久太郎秀政をハゆ敵の打出ゝの御座んるまと一人もあまさバ湖水へ切てめてくまとゝゆとハふうゝゆゝ先陣後陣一所ゑたゝみて千五百餘騎ありてもふゝバ切うゝるされども

敵も〳〵だうと手でも〳〵打出んといめりけてもおの
れぬとるれば秀政もまことい大よさとぞ立いうる
ふてううごとをなしたりけんと暫らく敵のふる
まひをうめ〴〵しあしらふを光春をうさびお〳〵
しめていきをもつうとび責たりけり光春その日
の装束い黒糸の鎧の袖草摺を紅と白まぜ一段置
にわどーたると著し塊いそのあろ二の谷と世よ
聞えてる三山の五枚鞠よ前立脇ざそうしろだて
山鳥の尾を真中にいうゆて立黄金づくりの丸鞠
の太カ二尺七寸高木の負宗希の皮の尻ざやめけ
てゆるらと結び大鹿毛とて八寸あまりの馬よ洲

崎よ捨小船と時たる梨子地の鞍とたて鈴虫とい
ふ名譽の轡とたまゼ明珍たてひの鐙をめけ厚ぶ
さの尻ゑいのえ立でうつとなるると芝打ゑげよ結
びさげこの頃たゆる染分の紫手綱ふさでるこう
たを白綾よ雲龍と墨繒よ狩野永徳ゑ筆とふるう
て書たる陣羽織の紅裏うちたると比叡山おろし
よふさるびうして下知をるさま大将なうとハた
が目よもめ〳〵ゑるひけ〳〵べ堀ゲ手の侍ども我打取
て手柄よせでゆとゑ〳〵をたり
永徳重信へ古法眼元信の曾孫松栄直信の長男
今年四十歳ゑり織田殿よ仕えて三百石と領し

けるが太閤ようゝ山城大原まで百石を賜へり
天正十八年九月十四日の没を
左馬助元ゟ敵の虚とを妙を得
たれば堀ゞ勢を左ゟ引うけ右ゟ追散し前ゟある
めとたれば後へ廻り在所さゝめばらゝを廻ゟ
どゝ明智ゞ手まで一騎當千とゝばもとゝる石川幸
次郎野村喜右衛門藤井兵部荻野喜之助村上兵庫
村田玄蕃野川玄蕃藤田左兵衛兒玉庄吉林半四郎
荒木友之丞船木八之丞三宅傳八同治右衛門原半
右衛門とゝゞめ三百七八十騎むゝくゝつとゝけ
たてゝうべ堀ゞ勢立あゝもるゝせう付らゝ色め

きゝ立て見えゝゝとき左馬助光春このむ所の十文字
穂ゟゞの鎗をうちふりゝゝ日向守光秀の肱股耳目
とたのまれゝ明智左馬助光春ゟこのゝ山崎の
合戰ゝのゝたれば今日こゝまで出むゝふたうそ
こゝのきそとゝばゝゝ突立ゟ堀ゞ手のめの心
ぢうゝを猛ゞ光ゞ荒手の猪武者ゞ先めの狂ひと
くるひまもるをあゝらひうゞ關寺さゝて引退く
左馬助ゝれとみそとゝゞ敵いうきあゝゟるぞた
きうある味方の若者ども日頃の手柄い今ゝゝゝ
證をあげると下知をゝべ荒木友之丞船木八之丞
うけむとうぬといふうとゞく大太刀うちふり

真先よりかけたつると見て石川村上野村三宅原林藤井荻野の面々もれあとらじと切うつふるゝ堀久太郎散々ふうちあつて崩さたつ光春うつと見るもうつも秀政のゞさじと突うつあやまつて鎗の穂と突折しうばかの高木貞宗二尺七寸氷の如くふるゝと打ふりうつるとかうつ七八人へ切たとし秀政そぞろうつるべうとけるゝと秀政ゝ家老奥田三右衛門主と云とうつゝセじと中みとりて入秘術とつくゝて戦ふうつ

奥田三右衛門の女い堀太郎左衛門秀重の妻ゝて久太郎秀政の母ゝ然ば三右衛門へ秀政の

外祖父ゝ三右衛門の子ゝ七郎五郎といひそ

の子ゝ監物直政といふ

堀久太郎秀政敗走の事

并林半四郎猛勇戰死の事

堀久太郎秀政ハ明智左馬助を引ひきんで只一のみゝ破らじとゝけるゝ左馬助万夫不當の勇将ゝて多くうされて立あ〜もるく迴るゝどゝ堀ゝ勢多くうされて立あ〜もるく敗走しつる上左馬助ゝ手ゝ一騎當千とゝばゝて石川野村藤井荻野村上北田野川藤田皃玉林荒木舟木三宅原ゝどいふものゝども左馬助ゝおとろ

び切まはらうとべ堀ゞ陣いふ〳〵ちゝひとつ闌
寺さゝて引てゆ〳〵秀政そうみとゐ〳〵あつてれ味方
ののどもいうふまびめわどゞ腰をぬう〳〵げん
左馬助とても鬼神よあ〳〵び何わどのことゆあ〳〵ん
然も敗軍の殘兵のうふ臆〳〵て引足ふるとさまで
よおそゞ〳〵いひめひふ〳〵とゝる内後陣の勢
いつゞきふん敵い左馬助只一人あうそれよむう
ふてみ〳〵ゝ追う〳〵ま〳〵といくれふべ人よ向
べき面ふ〳〵命いちきてゆ何うをんてゆ打う〳〵ま
討ことゆとてひ〳〵下知をふ〳〵めて奥田三右
衛門ふこ込〳〵左馬助とうう結ぶれをみゝ堀ゞ

手のの息ともつうど奥田うをとめふちゞと
一度ふどつと切めゝる奥田い年老されども是ま
で幾度の場数を經ろうも打のゝ達者ふう光春
ゞうちこむ太刀と引ちづ〳〵横よちう〳〵ゞ小躍〳〵
たとへべ花よくゝ蝶々のおどつまひつふと
ごゝ〳〵敵ふい骨を折をべ〳〵我身い息をたゞひつて
生捕ゞやとおのひこと追つまゝゝのたゝうふた
ま光春ゞ武功い今よちゞめび世人よゆるされつ
ゝべ奥田ゞ心をとゝゆ〳〵もさとう丁と打てい一足
退ちてさと切てら横よちゝと足場ふさ處よ折立
て丹波侍の又ゞよいちゆふまう〳〵ゝ堀ゞ手の臆

病武士ふ一あて當て肝をひやさせつと下知しけ
るべ何とてあまりゆびさ丹波のの〳〵刀のこれあ
ぢとて御覽ぜ〳〵といふうと見るべ十四五人一む
るる太刀長刀とうちふり〳〵切て入縱横無尋ふ薙
でまはるべ堀ゲ手のものもと切るびけ〳〵るる蜘の
子とちらゝとゲ如くふげ散たり丹波の衆い是と見
ておいさてふさ人々うか軍といふのいちい合
さう合首ととりつこ〳〵るとつこ〳〵てのちる大うる氣
味ふ〳〵おゆるのものちるとさの〳〵ふげてい詮か
〳〵やめ〳〵強へうへ〳〵ふへと大手をひろけて追
ひけまはる堀ゲ手のものあまりふ手ちけ〳〵おい

ひけらるるうへ〳〵もものへさびる迯たりしうへ秀政
大ふいうるおるるわど小勢なるのふもの〳〵まで追
つめらるて太刀打までもるる〳〵迯しことの口惜さ敵
を百騎ふ足ざるのものとさまで迯ることものいと采配
をとりていさむるど耳ふも更ふ聞入ど秀政馬を
立直〳〵敵ふへもの〳〵向ふものふ我を手本ふせるや
こ云まふ〳〵大身の鎗を取て真一文字ふたゝきた
ゆるべ明智方むふ〳〵ぺつと追立らる秀政聲うけ
見るも人々續けやのものどもと松のあ〳〵のおつ
ふ木の葉をさとふゲ如く押うけ〳〵れべ丹波侍め
のとの〳〵ものとふことゲまう汗を血ふそむるでの

うふたゝめふたう秀政侍ども主とうさせゞと前後左右ふ立ゐるゝびし潮のみつるゞ如くめけ立るのふたとへくいとんとたれべ秋の野もとゐまぬくあるとてさをぐふさも似たりゝゝふ處へ明智方三四百騎ごうう寄くる中ふう大音あげ是い冊波侍の死のとう筋骨いわそく生きたれども肝ふゐ〳〵人ふとぐれゆへべ軍場ふ七十余度いぐつを

どいとゞ一度も不覺ととゝびたゞ〳〵田舎うその事ふいゝへだ都の人いゝうふたゞいまたれへ罷出ゆ堀どの〳〵御内すて隨分肝の太めゝん御方い是へ御出ゆて互の肝をゝゝべ申度ゆと云をみ

きびいうあも只今すて手いゝてゝゝゝゝと見えたきてゝる鎧の袖草摺大うゝ切おとされ甲のふゐろもすぐゝふ鉢ぐうめゝゝ頬もゐく荒ふあきてゝる鬚多く顔色あゝく眼つぶゝふ鼻ためゝくまとふ仁王と作う損じたる如き大男の三十七八と見ゆるゞ四尺ぐうゝの大太刀をき一尺七八寸の脇差の刀九寸ぐめゝの馬手差をゝゆるき出扇ひゝゝきて打ゆうひ堀どの〳〵御内ふ我とあめこん御人いゐるきう加様ふ御待申ふ何とて臆〳〵て見えたまふそめ某丹波ふあゝ〳〵とき赤井悪右衛門と申侍と鎗下ふ仕とめてゆひ〳〵林半四郎すてゆ

今日を最期とたのひさこめてひしゝぐ堀とのゝ御内の衆と一合戰仕うそれと冥途の嘶のさ泥婆の見納めとゆゝしちらく打寄あひ半四郎が首とうて思賞よ預さとよはとうゝ穂も長く又廣よ見えゝ笹穂かうのけゝ首まて朱ふうゝとふりかたけ肩腕ともめとゞ流るゝ血を舌を出してあめまとゝふとゝ笑ふて立たるえ實も長坂坡上ふ大八の蛇矛と横たゝ戰ひもせゞ退ゝもをゞとうぞゝつと夏侯覇と落馬させゝ燕人張飛ゲありさまもゆゝゆらんと敵も味方とおちたそれをえいうふとあうめ居たり秀政ふれとゝつと見て敵い一人さまゞそ獨ぬきんで高名をんとあのうをさ軍とふをとちうをたゞ打うと惣ううふゝて打取べゝ閧と作りてうちうをとふそれ進めよ臆とるふとゆうふとゝかうてひうとるふと事ふまのうよ下知それお堀ゞ手ののの三十餘人死生ゝゝゞの猪武者さつと一切切てゆうる半四郎いられと見てゆうらと打とうゝひ羽柴どのゝ御先手ふ堀久太郎どのいとふ聞ゝゝ大將と丹波あうまでも噂してひひゝう今日見參ゝそひゝぞゝとにゆひゝるあひよ見えゆよのうふ敵い手負の死武者一人それとうさんと評定ゝそ二十三十の侍ともう一

所みなうてめつふとるそれすても半四郎う手柄のわどいちらまてらいで御相手ふるべきぞ発ちふのさまふなと呼びつこうと一ふう二ふ丁鎗の柄をふうこうろうて立むうふそのあうさまのてやこと雷電ふどはうどふ〳〵堀う手のの〳〵のてあまし蜘手角縄十文字あうると幸ふぎふ七難伏飛龍の如くめけ廻う前ふあるめと見えべ後ふあう右ふまはれべ左ふうへる弓手い蹴殺し馬手い胴切まうくひまた切ふを〳〵死骸い山と積ぞう荒ふあれう荒まはとべ堀ゞ手の者恐怖と後陣のみうさ八百餘人居どくまう誰う一人我

そうんてあれとうくんといふ人ふ〳〵半四郎いふと見て軍い是まぞなう去べ弓退左馬助どのふこのう〳〵注進〳〵そのうち死んも遅うう〳〵と云さふ静々と味方の陣とうろうざ〳〵引てゆく堀ゞてのの〳〵七八人一川ふあうて追掛ると半四郎ふう返うやさ〳〵も半四郎を追留んとそるこうろうざふめぞうそい一鎗まいうんといふうと見えべ躍めう二人一所ふ突とふ〳〵そのまう鎗と取直し馬手うう来るとゞ拝を突前ふうめうるとたう一太刀ふ頸うち落しそのの刀を頸ふとしあて日本一の剛ののの〳〵自害とる様と見物〳〵汝等ゞ武運

みつきて自害をるときの手本よをとゝのひ自ら
て腹自身首をとりおとし三浦の荒次郎義同じ荒
井の城まで討死をしもゝゝゆとだうゝおどろう
ふ

重修真書太閤記七編卷之十四終

重修真書太閤記七編卷之十五

左馬助光春大津勇戰の事
并大鹿毛湖水を渡る事

明智左馬助光春い林半四郎じ最期の合戦抜群ふ
して討もゝゝ多く堀じ手の者を
ゐろぶしふうゝこのち自身ふ首をゆきおとし
さまと見て天晴侍ふ日本一の剛の者とゝ其方一
人を云ふうん暫く待ふ我も跡ふう追付死手の山
三途の川をゝ諸共ふうち渡ゝ閻魔の廳ふ並居て
大津合戦の有様をゆきるゝゝとゝふうと見とゝ

三尺五寸の刀の鍔元まで血ゑ染うしゝと打振く左右をみゑ共家の子郎従一人も續うゞさそたそゝゑ是等も落うとしゝゑと見渡をゝ筭と亂をし死人のうちゑ猶も殘ゑる袖印みゑ我家の笹の葉ゑれゝあゑ可愛や我為ゑあれも死をしゝ彼も討をるゝいさゝらい林一人ゝゆゑ非ゞ荒木船木三宅藤井原荻野いづゑも美事ゑ働をしゝゑゑゑ行しゝゝ心許ゑしゝと川ぶゑをく寄手ゑ向ひ先達しゝ我手のゆゝ追善ゑゑゑゝ拜こうちめぐる輪廻の車をゝう大白牛車の胴切ハ明智ゞ得たる所ゑう向ふとをゝうたゞ當ゝと福ひ切たゝゝゑしゝひゑゑ

いゑゑたゝゝまた十六七人切倒しゝ仰ゝる大刀をたしゝ直しゝゑゑをみゑゑゞ我手の侍二三十人鎧の袖草摺も切落をれ大童の姿となう一足も引ゑ引ゝと戰ひ居たうゆゝと見ゝゑう左馬助大音あゞく笹の葉の印つけゝハ明智左馬助ゞ與力の衆なるゞゝ當家の運の盡ゝと見捨ゞ飽すゞ忠義と竭しゝゑふゝとゑそ嬉しゝけゑゑ但今生ゝて面々の軍功を賞をゝべき力なくゆへゞ左馬助とのゝゑゑ先立この戰場ゑ討死しゝ修羅闘諍の大將軍となう塊卒天を攻取をのゝゝを安樂ゑ任をしゝめんとおのゑいいうゝゞゝんゞゝうんとあゞ笑ゝゝ例の大鹿毛ゑ一鞭あつ

まべ世まと双ぶる逸物なり呂布の赤兎馬郭子儀の
獅子驄もゆゝとおのゝふ計まと躍り上り蹴る踏む
噛むの三徳と顯えゝひまべ光春もまるまと力と得堀
び多勢まして備えゝる真中へ面もふらで駈入たり
堀び勢ども林まとき間ゐく切立らまと手負死人の
負多くとこゝ色めき立たる處へ黒繪の雲龍をひ
え山おろゝまと吹ゐびうと颯と突入されば一たま
うもたまらで崩まとてろ光春いゐゝ馬とうひ立ゝ
前後左右へ切ゐびひ近づくのゝとべ引搔き東西
に投うちゐゝひまべそれまと當うて半死半生のゐ
の又い血を吐疵をゆふむる古も今も世まと類なき

打ゆの業の名人び今日とゆぶうと振舞べ誰うい
たのゝと向ふべき須臾の間ふ五十餘人を切まひ
つと光春味方をまつと見るまゆ悉く討死ひまと
ぶ光春いゝゝ勢猛く百千の雷の只今落るび如く
万丈の洪濤び岩石まあまうて碎くる態もゆゝゐ
らんとおのゝふでうりに馳回まべ堀び手のゆの殆
のてあゝてゝ見えたりひつと奥田三右衛門ひれ
と見て拙きのゝ有様や惡鬼羅刹なりとも只一
人なゝ力いゝゝ共身ふ矢の立ぬといふもあらじ
打物まびの早ゝとも切ばあどうまれざらん真中
ふ取こめ引つゝみゝ突立い終まい是を切べきぞ心

と一りゝ寄合やゝの共とさゝ〳〵げゝ計うゝ
秀政めの共とてむを見て氣早き左馬助是を知や
さゝゝき敵の軍立かそれとび角あと破るかとゝい
ふゝゝゝ多くゝの敵のその中へ颯とおめいく切入
お最初の擬勢ゝ似もりうび左右へちつと引分と
中を明てぞ通ゝひる光春ふゝこ度取てめゝ主客
地を易たゝうゝゝゝ秀政もゝゝゝどちつと引たりけう
光春大音あゝけ今日明智左馬助ゞ只今討死とる体
めゝて面々ゞ明日討死の手本ゝせゝゝやとゝのゝ
うゝめゝたう火を散ゝそぞうけゝわどゝ堀も奥田
も引退きて影も見えゝゝ光春めゝゝと見るゝう軍も

とゝゝきわどい為たう然べ坂本ゝ立越て明日の軍
の用意せんと一鞭うてゝゝゝ十丈の龍の浪をとゝる
ゝゝ地ゝゝめの大鹿毛湖水の沖へと游きゆゝ秀
政奥田ゝれをみてあの漫々たる湖へ馬をゝを入
何とうをるあをゝゝとゝいふぞうゝめゝびを飲で
見物をきるわどゝ光春いいとのどやうゝ馬を游
がをゝゝゝとゝゝゝゝゝる折ゝそあをゝ比叡の山
風おゝゝきて雲龍の登るが如く見えたうこなゝ
の岸ゝゝ堀ゞ勢どもゝゝびらをたゝきを手と拍てあ
ゝむざんや明智左馬助さゝも剛なる武者なれど
武運と共ゝ智慮もつゝき果ゝゝゝ此湖を何とゝて

馬にて渡さとべきそれ知ぬ左馬助にあらざれバ何さま様こそあるならめ定めて敵に首を取れしと水に溺れて死ぬらんあくれしなりしやといふもあり心となき徒ハ楚忽の振舞とうちふもあり兎角もするわざに辛崎だにへ打あげ扇開きて打つゞひ馬をいさむり物具の水ちらしを悠々とおせ手どまちてならぬ居たり是ハ光春がわしとなり馬をお心にて御のゝとたのひしなまぞバ過なく湖を馬にて渡し古今に秀し名誉を傳ふ

流布本此段に湖水馬渡の辨論ありと云共後人の臆度にして云ふたらバ今此地に来りて是を観

ふに渡瀬の有無あるを説ことあらざれバ光春の名誉ハ只一心を以て馬を御するといふ九郎判官の御法なり今の人死馬を御するを功として生馬を御することを知ず鉄拐が峯を落とし判官殿の意を推て今日光春が湖水をおさせしを料り知バそれなそ真に馬とのる人といふべきなり光春寄手の近づくを見て駒に打のり坂本の町へのり入十王堂の前にいたり馬より下手綱を切て香包をいくこ堂の格子に結付その端に天正十年六月明智左馬助光春大鹿毛を以て湖水を渡ると書をとりまさめしくに同じ

く書て立髪ゑ誰ゑすとも此馬取てのうゑへとゑと
たゑ終う城の中へぞ入ゑける是いゑの馬を城中
ゑ引入なゑべ亂軍のうちゑ傷きめやせんと馬を深
く愛とる情こゝろ終ゑ馬の命をたゝみける光春
の意の内ぞやさゝめうけると敵も味方とおゝか
べく譽ぬ人あそなりうけ是後三年の軍やぶと金
澤の城落る時清原家衡ゑ秘藏の馬の敵の手ゑと
たらんとと妬く思ひて自身これを射殺ゝたるゑ
らゝべゝ雲泥万里の行跡やと世の語くさゑあり
にけり

明智左馬助光春坂本入城評議の事

并光秀室家深慮貞烈の事

堀久太郎秀政奥田三郎右衛門以下湖水の汀を一
文字ゑ馳付坂本の町ゑ至り見ゑべ十王堂の前ゑ
ゆの大鹿毛と繋ぎう堂前の香爐ゑい名香の薫
う紛々ゝゝて手綱ゑい誰すとも取てのゑとゝゝ
ふゝたり馬い眼前湖水とゝゝゝ名馬なう秀政
あれと見ゑゝうゑまつ涙をゝらゝゝと流ゝ天晴武勇
の冥加ゑ恪ひゝ左馬助敵ともいゝ逆徒ともいゝ
身一人い古今ゑれなる剛の者うゑ左馬助い此馬
の駿逸をたゝゝ誰すとも取て乗と記をゝ筆の跡
にいくゝくの情とゑめゝい優なう美なう侍い未

期するのみ有たきものと感歎しつゝ又いろ〳〵の〳〵て左馬助をとゞめ出〳〵て味方よりとゞめと思へども取て乗べき大将のあらざれば如何よりとんと繰うへ〳〵まづ馬を取て大津の戦場の振舞ふ湖水をとおりて辛崎より打上たり〳〵名誉をあらかくめさ記〳〵筑前守の本陣へ注進したりけり淡海輿地志畧より志賀郡打出濱い松本村より馬場村迫の間の濱を云木曽義仲今井兼平と栗津原にて行逢やさ打出のくゝまを迫引退と云又近衛政家公の真所引て矢橋へふ舟い今打出の濱の跡の追風とうまゝせるゝよりれば今松本の

濱石場といふあるべ〳〵と云り即明智左馬助光春堀久太郎秀政と戰ひ〳〵處なり坂本城い今坂本大道町あるひい瀬戸戸津といひ又ハ今津といふ地ふある東南寺の地なりと云り織田信長公山門を攻亡ぞ〳〵坂本濱ふ城を築き明智日向守光秀をして是を守らとしゞ光秀既ふ信長公を弑し山崎ふ破れ小栗栖ふ死して後明智左馬助光春坂本の城代長閑入道と相議とゝべきたゝめ安土城を焼坂本へ急ぐとき大津打出の濱〳〵て堀秀政ゞ勢ふ行逢ひ苦戰して坂本ふ入長閑齋をよび光秀の妻室と共ふ自害し城ふ

火を放つと云其後この城を大津の濱よりつ〳〵その蹟より東南寺と立故より城の石垣今猶存ひ或説より比叡辻の北の山なりと云い誤る〳〵

筑前守い秀政ゞ注進よりて左馬助ゞ馬すて湖水をゆく〳〵と聞うけその渉り〳〵大鹿毛を十王堂よりのるゞ〳〵と深く感じその馬ゆとへとい くるゝにのう秀政ゆれを本陣より引進を筑前守ゆ を見るゆ丈たゞ〳〵尾髪ゆ〳〵迫厚くゆゝに勝を 〳〵名馬なり〳〵べ筑前守らゞう〳〵立て是を牽廻 〳〵天晴汝い馬中の龍なりさゝでい争で湖水をと たゞべを神妙〳〵と褒義ありて秣うひ水のよせふ

ゞ〳〵て後此馬ところさに留め置ゆ〳〵と秀政より申さを筑前守ゝに秘藏をらを曙と名と改め側とゝふ たゞ櫪飼をたり明る天正十一年賤ゞ嶽の軍のと を美濃の大垣ゆりせ二里半の悪處とゝゆ乘より乘 を〳〵いゆの馬なりちゞめ逆徒より從ひ〳〵と闇夜より たとへ自身を以て白晝とゆ〳〵さてゆそ曙と名付 〳〵とうやそれい扨置羽柴方の諸侍ゆひ〳〵馳着坂 本の城へゆ〳〵寄一時責より責破らんと競ひ立〳〵ら とも折節空うゝ〳〵のり夕立ゆゝさうより神さへ鳴そ たゆゝさひを〳〵筑前守大音より逆徒の籠る処とゆへ どもゆれい本人の在るもあらび枝葉の老人ゆん

との任家あり何わどの車うあるべき明日辰の刻
より惣軍一度に押詰一息攻に攻拔べしとぞ下知せ
らるゝを聞うり堀ゞ勢をくゞめ諸大将いづれ
も晴間を待て爰彼處に立休らひらゝか打解て腹帶
ゆるゝ帷幕の内に入ひる是い筑前守ゞ謀すて
雷鳴のごとされる城うり落るのをゞ心安く落さ
をんとの心入あり　たとへゞ此城少しとも死武者
ゞありとなりたらゞ寄手を多く損ぜゞ雨いろ
うなり雷いてるめく能隙なり只今落んぞる城
より籠りて犬死をんあり一ずづ落んとおのゝの
と快うく落したらんより城中の兵士大うく落失

て明智一類ぞうにあり兼てうり筑前
守ゞ得たる處の秘計なり案の如く最初より三千
餘騎と聞えしものゝ次弟ぐより落失て今わと
や八百餘騎より足ざりひり左馬助光春い長閑齋と
共に本丸に入ひ光秀の妻女於牧の方まち迎
へ左馬助の湖水を渉りゝい異國本朝にたゝ
ぐうり希代の名譽なりさぞうりの勇士をあるど
も當家の運うるとむさ明智の名字今宵のさうと成
たりそれに付山崎陣のその前に日向守の許うり
内書ありそれい何事りやといふに日向守の嫡子
た龜山にありて既に早世ゝ殘るい二才の男子一

人なりこの子幼稚といへども正〻日州の子息なり筑前決〻て助置ざるべかあらば何ゐも〻て此幼兒を護そゞ明智の名字を興〻てるべこ車細々ふ書送らるたりさされば當城まて死とる命とたゞいさの幼息を見續べき由を落遺う〻〻侍衆ふこのさてるとこいそれ〻〻うべ左馬助心得さ〻べ諸侍ふこの〻〻と披露〻誰う遺うて養育とんとしるゆ承たうゆそんとてまづ客殿へ諸侍を召あつめ左馬助長閑齋一同ふ申げるい明智一家の滅亡今いんゆ一二時ふをゆうゆ落ゐんとて諸ともに死出三途とゆえんとふ〻ふ志の篤〻年來の恩義を忘さ

ずそこぬ勇士の肝魂い萬夫不當と申べけるたゞ〻夫ふ付大事の所望ゆうの何事ふ〻べ日向守の妻女の申さる〻旨を背さゐふゆ〻き由神文を以て御答あるべこふゆ言げるべ村越三十郎三宅周防守堀口三太夫村上善左衛門今峯新助内藤三郎四郎尾石藤左衛門安福次郎右衛門中川源太夫荻野河内守久下三右衛門中澤四郎左衛門奥田佐右衛門妻木勘助船木八之丞奥田清三郎以下いづともふい珍ら〻さ仰どうふ元るう二川のき命を明智殿ふ奉うて只今やゞ付副奉るのを何事の心元ふ〻て神文るゞこ宣ふるゆ但夜も既ふ

ふけるとうひ敵のふるひるも程あるまゝ夏の〳〵鹿
のふくろ角手束ゑ足ぬそのわどゑ仰られひ御車
を何とひとも命を捨ゐ〳〵ゆゝわゝ〳〵弓矢八幡諸
天善神も照覧あれと内室ゑう仰出されひ御事ちと
も背きひまゝ〳〵と申ひる時於牧の方障子開きて立
出らゐと面々の義心ハ千尋の海猶あさ〳〵万丈の山
陰て卑〳〵冥土ゑまゝ〳〵ほゝ日向守殿の心ゑもいう
計嬉〳〵とおのひゑゑらめ偖神文のうへを此幼息
のことを故殿のことをとれ〳〵ゑみゑひぞゆいうゑも
〳〵て當城を忍び出こゝと養育〳〵明智の名字を興
〳〵て給ひへとて城中ゑ貯へ〳〵金子と殘りゐ〳〵

取出〳〵ゐれを列坐の諸士ゑうとさ〳〵ひゑこハ何も仰天〳〵
明日の軍ゑ戰死〳〵山崎大津の軍ゑ〳〵ゐ〳〵〳〵無念とて
らゐ〳〵ゐんと存詰てひゑ〳〵めのとゐゐいうゑ以の外の仰
を承ゐるゐのうゑゑこゐゐ〳〵ゐゐも口を閉て詞ゑ〳〵於牧
の方聲ゑるそ〳〵左様いとれんとおのひつゑこハ神文を申
てひのゐと弓矢八幡そむゐ〳〵とひとれ〳〵詞のゐゑ耳ゑの
ありてひなゐ諸天善神も照覧ひぞゆとひとれ〳〵わどゑ
詮方なゐ〳〵畏てひゐゐ〳〵ゐも申合この幼息君を御ゐう立
申べ〳〵と答〳〵ゐゐ於牧方も大ゑ悦びさゐゐハ今生の暇を
なゐ一獻とゐゐ〳〵給へゆと言ひ〳〵我等い最期の用意あ
うとて障子引たて入ゐゑ左馬助光春ハ二の谷の曽ゑ

雲龍の羽織とハ時ゟ取ての名物なり戦場の烟とふさん
とあ〜ゝむ〜〜と〜金子百両ととゝ〜〜西教寺ゟ送りしと也
西教寺ハ上坂本ゟあり大窪山智善院西教寺と号し天
台律宗文明十八年真盛上人の開基本尊阿彌陀佛佛ユ
春日の作也不退轉念佛の道場寺領九十石二斗六升余
真盛上人ハ伊勢國小倭庄大仰村の人也父と小泉左近
将監藤能とゝ〜ゝ紀貫之十七代の後胤なり父子とも
北畠具教卿ゟ仕へ〜ゞ真盛上人ハ壯年ゟ〜て出家〜
天台律を開〜とゝ當寺ゟ光秀の墓あり

重修真書太閤記七篇巻之十五終

書
逸勢ゟ湖水増
昆式ゟ直
比叡
眼ゟ羽織
鶴ゟ雪龍
可利書